
魔法少女リリカルなのは～魔王に転生させられた主人公～

湯飲みの茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 魔王に転生させられた主人公

【Nコード】

N9603V

【作者名】

湯飲みの茶

【あらすじ】

神によって転生した先で、俺はある事故によって死んだ。でも後悔はしていない。自分の手で愛する家族を守れたんだから…。でも実際は家族は死んでいて。死んでしまった俺を転生させてくれるのは魔王だった！？。新たな力を手に復讐に走る！

注意！この作品はオリジナル要素が入っています。

第一話 魔王とエンカウントそして転生（前書き）

どうも、湯飲みの茶です。

処女作なので巧く書けませんがよくお願いします。

一応、定期的に上げていきますが、受験があるので偶にストップするかもです。オリジナル要素多です。その点をふまえても読むという方は大歓迎です。イヤだと言う方は申し訳ありませんがブラウザの戻るを押してください。

では、湯飲みの茶のリリカルなのはストーリー開幕です。

第一話 魔王とエンカウントそして転生

「……………ここは、どこだ……………」

周りを見ると、そこは、黒よりも漆黒に近い空間に俺は浮いていた。

「少なくとも神の所じゃなさそうだ……………」

あいつの場所は純白の白い空間だから。

では、ここは…？

まあ、良い、ここがどこであるうが、アリーを救えたならそれで…。

『残念だがオマエのアリーは死んでいるぞ。』

「誰だっ!?!」

声がした方に顔を向けるとそこには、黒い鎧に、黒いマント、そして顔を覆うような白い仮面をした男が居た。

3

『何度でも言おう、オマエのアリーとやらは、死んだ。』

「ふざけるなっ!?!」

そんな筈はない!

「誰だか知らないがそんな訳ない! アリーは、生きてるはずだ!」
魔力を全開で張った障壁がそう簡単に破られる筈なんてっ!?!

『たしかに、ただの事故だったら、オマエはともかくアリーとやらは死ななかつた。だがオマエはアレが死んだ理由は本当は事故ではなかつたらっ?』

「何っ!?!」

『それが事故ではなく人為的に起こされたものであったら？』

ま…まさか、そんな…。母さんの実験に限って…。

『そのオマエの母親だからこそだ…。オマエの母親は何でも優れた研究者だからな。』

だ…だとしたら。事故を起こしたのは…。

『今、オマエが考えている通り、犯人は”時空管理局”だ。…オマエが死んだ後に始まっている実験にオマエの母親が居るしな、その側に居るのが時空管理局が用意した研究員もいるぞ？』

「…つまり時空管理局は実験がしたいがためにアリーを殺したと？」
『その通りだ。』

なんだよそれ、それだったら俺だけを殺せば良いだろうが。なんでこんな。

『さて、自己紹介が遅れたが俺は魔眼の魔王、名前はないから適当にアイとでも呼んでくれ。転生者君？』

「…なんでそれを知ってるんだ？」

俺が言うつとアイは仮面を歪ませこう言った。

『俺の次、まあ第二の魔王がオマエに決まったからさ。俺はオマエが転生する前からオマエ見ている。オマエの散々な人生を、神に人生をいじられ、例え暇潰しとされ殺され転生させられながらも必死に生きる姿をな？そして、結論だ、オマエの”負”は俺を越えている実に素晴らしい！』

「…それがどうしたんだ。」
不機嫌そうに答えるとアイは言った。

『オマエ、…”復讐”がしたいか？』

「復讐…？」

『ああ、そうさ復讐だ。俺があの世界にもう一度オマエを転生させてやる。復讐するための”もの”もオマエにくれてやる。どうだ？でもその代わり、オマエはその世界の魔王になってもらう。と、言っても姿や形もかわらねえーけどな。どんな魔王でも良い。矛盾してるが優しい魔王でも良いんだぞ？』

「…本当なんだな？転生させてくれるんだな？」

『ああ、本当だ。』

…なら、復讐してやるよ…。

「アイ！俺を転生させる！！」

『…良いんだな？魔王として生きるということは不老不死じゃないといけないぞ？』

「そんなこと、落ちてる石コロほどどうでもいい。ああ、ただ容姿はそのままだな？」

第一話 魔王とエンカウントそして転生（後書き）

如何でしたでしょうか？

主人公の名前や能力などは次回出します。

指摘などを受け付けますどんどん送ってきて下さい。

感想などを貰えると嬉しいです。

第二話 お前が俺に勝っているのは身長だけだっ！！（前書き）

どうも湯飲みの茶です。2話出来ました。本当は昨日出来たのに
データがぶっ飛び……

第二話 お前が俺に勝っているのは身長だけだっ！

白い空間になってからどれ程たっただろうか？

もう軽く3時間は経っていると思う。

目もちゃんと見える様にもなった。

暇だから復讐方法を考えることにしよう…。

…今更だが、…復讐の意味は知っているがどうしよう？
泣き叫ぶまでくすぐり回すのか？

…そもそも、殺されたからって殺し返したくも無い。

…俺、復讐できないじゃん！？

でもどうする？さすがに俺あんな事言っただから復讐しませんは出来ないぞ！？

……さてよ？あいつ等はアリーを殺した理由は母さんを研究員として招くことだ…。

だとすれば。

俺あいつ等の実験施設などに乗り込む。（俺たち殺したぐらいだから、非道な研究施設ぐらいあるだろう）

データや実験物を破壊し研究施設を破壊。(生物は逃がすでしょう)

イコール復讐？

「完璧だ！人を殺さず！復讐出来る！まさに完璧だ！」

……これ、復讐か？

まあ、別の復讐方法を考えるとして、まだ転生できないのか？幾ら何でも遅すつ！！！！？？？

目を下に向けるとそこには、綺麗な綺麗な町があった。そう言えたかもしれない。

なぜそう言えないかって？それは…

空を飛べないのにメツチャ高い所から落ちてるからだよ！！

「死ぬ！死ぬ！死ぬ！死ぬ！死ぬ！死ぬ！死ぬ！死ぬ！死ぬ！！！！！！」

復讐どころか！地面に足を付けられずに死んじゃう！？

そう思ってる隙にドンドンと降下してきている。

周りが見ると夜であり叫んでも誰も気付かない。

てか気付いても助けられるはずがないのに叫んでしまった。

「誰か！！助けっがぶ！！！！！！」

ザッパ〜ン！！

運良くもそこはプールらしく落ちた衝撃は少なくなったが、ハッキリ言う。何百メートルから落ちてプールに落ちたとしても、まず、死ねる。

「ガハアッ！！」

パシャ！！とプールから慌てて上がったが、まず言おう。1回落下で死んで、水に溺れて2回も死にそうになった。

「けほっ！！けほっ！！げほっ！！……はぁー、はぁー。ふう。」

「助けを呼ぶ暇も無かった…。死ぬのは3回目だけどぜつつったいに慣れないってこれ。」

アレ？そう言えば…。

「何で俺、生き返ってんだ？」

ああ、魔王として死んではいけないから不老不死に成ったんだっけ。たしかに、…死ねないのは辛いなあ…。

「そういえば、ここは何処だ？」

着ていたシャツを水絞りながら考える。

アレエ？おかしいなあ…

「このシャツ！めっさちっせー！！！？？」

どう言うことだっ！？このシャツめっさ小さいんだけどっ！？
良く考えたら、俺の視線も低くなってる！？

「そっだ！プールで！！！」

夜のプールは月の光を反射してるから、見えにくいけど鏡にもなる。
プールを見たら5歳くらいの顔の自分が居ました…。

「何で幼くなってるんだよ…。」

もう気分がものすごい低くなった…

「うう〜それよりも現在地を知る必要があるか…。」

そう言い俺はシャツを着ながら、プールサイドから学校？の校庭に
出てその学校の校門に書いてある学校名を見た…

「うん、海鳴市第四小学校か。」

「これならもう充分すぎる情報だ。問題はちゃんと使えるかどうか
…」

俺はその学校名を記憶し目を閉じて思った。

地球の本棚！！

しばらくして目を開けると周りが白い空間になっていた。そして、俺を囲む様に本棚が無限に立っていた

「ふう、神にもらった能力は使えるか…よかったあ。」

ほっとしたが、そんなことより現在地を調べなきゃ。

「キーワード、海鳴市周辺、地図、詳細。」

そう呟くと、本棚が虚空に消え虚空から新たな1つ本棚が出てきた、そして、その本棚から一冊の本が本棚から出ておれの手に飛んできた

本には、海鳴市周辺の地図が詳しく書いてあった。

それを頭に記憶し本を投げ捨て…

「検索終了ー」

と呟く、すると白い空間から現実の空間へと景色が変わった。

「ふう、周辺の地形はわかった。これでまずは…安…心…」

やばい。本当にやばい。何がやばいって言ったら。

「寝る所がない……」

どうする……？公園で一夜を過ごすか？

駄目だ、幾ら水を絞ったからってシャツとズボンが濡れている。確
実に風邪を引く。

そうだ！地図に載ってたホテルに行こう！

駄目だ、俺、金持ってない。

もしかして詰み？

俺に風邪を引けと？

どうして気が付かなかった。

前に転生したときも、

アリーと母さんが見つ付けてくれなかったら死んでたのに、
それを何で今まで忘れてた！

……終わった。風邪を引くのが今ここに決定した……

そう思っていた時……

「君、大丈夫？こんなに濡れて、風邪引くわよ？」

1人の女性が俺にタオルを渡し、そう言ってきた。

「どうして、そんなにずぶ濡れなの？今日は雨降ってないけど？それに今は夜中よ？どうして外にいるの？お父さんやお母さんは？」

……どうしよう……

何言えばいいか分からん。転生者だから母さんは何処いるか分からないとも言えと……」

「へえ〜そうなんだ？」

「ああ、その通りだっ！？てっ！何だこいつ！？人の心を読みやがった！？」

「違うよ。君、途中から全部口に出てたよ？」

そう言われて口を慌てて手で隠す

「ふふ、その様子だと本当のことのようにね？だとするとお家は？」

「……ここまでバレたらもう言ってもいいか……家は無いよ。」

「そう……だったら家に来ない？」

「えっ？」

「だから君、私の家に来ない？私の夫が病院にいる間、なのはが1人ぼっちになっちゃうの、君が来てくれれば、なのはは、1人にならないし、君は生活出来るのー石二鳥！……で、どうする？」

さすがに断れない条件出すなこの人、まあ、それだったら

「お言葉に甘えさせていただきます……。」

それを聞いた女性は嬉しそうに頷き

「じゃ、自己紹介ね？私の名前は高町桃子あなたはお名前は？」

「俺の名前は……葉波、葉波威月。」

「そう、なら威月君？私について来てね？家に案内するわ。」

それから少し歩き玄関前に立った

「さあ、早く上がって。」

「はい、お邪魔します。」

俺がそう言つと

「こら、これから威月君が住む家なんだから、お邪魔しますじゃなく、ただいまだよ。」

言われてみれば……

「じゃ、ただいま。これで良いのか桃子さん？」

「うん、惜しいかな、出来ればお母さんって呼んで欲しいけど……」

「いやそれ、母さん、お帰りずいぶん遅かったね。」は……。」

奥から身長が桃子さんと同じくらいの男性が歩いてきた

「あれ？母さんどうしたのその子。」

「ああ恭也、この子は道に立ってたから家に連れてきたの。」

桃子さん！？それ端からみれば誘拐みたいになるからもつと詳細を言わないと！？ってゆうか、ほとんどの人は道に立ってますよ！！

「ああ、訳有りの子供か。」
「通じた！？」

「そうなのよ、所でお風呂ってある？」

「母さんは出かける前に入ってた？」

「この子は何故かずぶ濡れだったから着替えないと風邪引いちゃうのよ。」

「ああ、わかった。母さんは風呂場に連れて行ってあげて、俺は服を持ってくるから。」

「よろしくね。じゃ威月君はお風呂場に行こうか？」

俺は桃子さんに手を引っ張られ風呂場に向かった

まず言おう。一人で入ったぞ？

それから恭也さんが持ってきてくれた服に着替え（だぼだぼだけど）
恭也さんに連れられリビングに向かった

「それじゃ、まず自己紹介。私はさっきも紹介したけど高町桃子、出来ればお母さんって呼んでね？で、こっちに座ってるのが」

「高町恭也だ。」
「ど、どうも宜しくお願ひします。」

「それでそこに眠そうにしてるのが、ほら美由紀ご挨拶。」

「あっ！ごめんお母さん！私の名前は高町美由紀。よろしくね？」

「はい、わかりました美由紀さん」

「で、2人ともこの子が」

「葉波威月です。桃子さんには知られてるから言いますが、転生者です。」

暫くの沈黙

「……はっ？」

「証拠はないですけどほんとうです。」

「それより威月君？口をなおしたら？」

「あっ！いつの間にか変わってたな桃子さんありがとう。」

「まあ、母さんが訳有りの子を連れて来たのはわかった、けどその子が転生者ってことはわからないが、君、結構強いね。」

「…何のことだ？」

「とぼけるな。」

「まあ、良いじゃないそんなことは。で、今ここにいないけど私の夫と娘のなのはが居るわ。」

「それでね2人ともさっき話したとおり、この子をなののは遊び相手として家に泊めさせてあげたいの。良い？」

「私は賛成だよ、なのはを最近ひとりぼっちにしてたからね。」

「……………俺も賛成だがその子自身はどう思ってるんだ。」

「あつ！言い忘れてたけどこの子は同意しているよ。」

「…なら任せるが、威月君、明日の朝6時に道場で試合をしないか？」

「ちよっ！？恭ちゃんそれは無理だつて！！」

「そつよ恭也、それは無理よ！」

……………どうするか、…まあ

「剣を使う試合なら受けるぞ。」

「「えっ!?!」」

「それにしても6時つて、知ってるか？6つて不吉な数字なんだぞ？」

「7時からやれるわけないだろう。」

「それもそうか。ただ1つだけ言って置く。」

「何だ？」

「”お前が俺に勝っているのは身長だけだつ！！”」

「…肝に命じておくよ。」

恭也が自室に帰ると美由紀さんが近づいて

「いいの？あんな事言っちゃって。恭ちゃんキレかけてるよ？」

「…俺の転生前は葉波流…つっても親父が適当に作った剣技があるんだよ。」

「適当！？そんなんじゃ御神流とは打ち合えないよ！！」

「大丈夫だって美由紀さん。さっきも言っただろう。あいつが勝ってるのは身長だけだって。」

「でも！威月くん、お布団引いたよー。」「お母さん！！！」

「大丈夫よ美由紀、恭也だって何も威月君を殺す訳じゃないんだから。」

「それはそうだけど…。」

「桃子さん、布団ってリビングにあるやつ？」

「そうよ？」

「わかった。じゃ、おやすみ。」

「はい、おやすみなさい。ほら美由紀ももう遅いんだから早く寝なさい試合の時は私が審判として見張って置くから。」

「わかった、でもその時は私も試合を見せてね。」

「わかったわ。それじゃあ、おやすみ。」

「…おやすみなさい。」

その後、寝静まった高町家

「ふう、全然発動しないなあー全能眼。やっぱり特殊条件下じゃないと発動しないのかなあ。もういいや、寝よう。」
顔を手のひらで擦っていたその時

ブスウ！！

「いっつつつ痛あああああああ〜！！！！痛い！！マジ痛い！！
！！何で擦ってただけなのに指が目に入るの！？？」

アレ？

なんか目に魔法陣が見えるんですけど。ちょっと！？まさか目に直に
触れないと発動しないってことか！？

マジで痛いんだけどこれ！？

なんか頭の中にHow toって出てきたんだけど！！

『全能眼は一回失明するごとに発動します。』
『 H O W
t o y o r i

「ふぢけんなあ~~~~~!!!」

第二話 お前が俺に勝っているのは身長だけだっ！！（後書き）

一応、威月も人間なので復讐といっても人を殺すのに躊躇う設定です。

誰だって憎んでるとはいえ殺せないなのでこんな風になりました。

ちなみに殺せなくても威月は骨ぐらいは折る気があります。

ちなみに本文で出た地球の本棚が神からの能力

全能眼が魔王からの能力

ちなみに他にも代償があります。それは今後に残すとして。

感想をまだドンドン待っております。指摘も受け付けております。

キーワードにギャグ？を追加

第三話 主人公は以外と計画的（前書き）

第3話出来た！

未だに全能眼は使わない。

第三話 主人公は以外と計画的

午前5時25分

「…目が痛くて3時間しか眠れなかった。」「
どうするか…1時間35分暇だ。」

「全能眼を使うのもなあ」
はつきり言っただけ痛すぎてHow toを見れなかった
からなあ

地球の本棚で恭也さんが使う技を見るってのも良いけど…

「せこいから辞めよう!」

にしても早く別の復讐方法考えないと…

屈辱的で…

アリーが満足しそうな…

うーん……

午前6時5分

「うーん、無いなあ」

午前6時30分

「あり得ないなあ」

「あり得ないのはお前だあ!!」

そうそう、こつやって横から切られそうなことをあり得ない事お!?

ヒュンツ!と空気がいけない音を出した

「危ねえーじゃねーか!!」

「時間に成つても来ないお前が悪い!!」

なんか：キャラ変わってね?

「それが素のお前か?」

そう言つと恭也さんが慌てて口を押さえた。

なんか桃子さんに会つた時の俺に似てるな。

「で、約束つて何だ?」「お前と!俺が!試合をする約束が有つた
だろう!!」

「アレって7時じゃないのか?」

「6時の間違いだ!!」

「嘘だ!俺はお前の口からちゃんと7時と聞いたんだぞ!」

「それは、7時に試合が出来ないだろって言ったんだ!!」
「あっやべーやっちゃまった!」

「やっちゃまった!で済まないぞ!早く道場に行くぞ美由紀や母さん、
そして、なのはが待っているんだ!!」

ガシュー!!

「ぐわっぶっ!!きゅびが!きゅびがじまる。ベリをばなせえええ
え!!」(訳:うわっちょ!!首が!首が締まるう。襟をを離せえ
えええ!!)

道場に移動終了

「さあ、威月!さっさと試合をするぞ!!」

「あの、恭ちゃん。威月君酸欠状態なんだけど…」

「うっぶっ!!」

「あっ!直った。」

「昨日と今日で2回酸欠で死にかけるとか…いや昨日は酸欠じゃ無
いか。そんなことより恭也さん!!俺何回もタップしたよなギブギ
ブ言いながら!!何で無視した!」

「うるさい!!そんなことより試合だ試合!!」

くそっ、こいつ聞く耳持たねえ。

「あの〜威月君？」

誰だよって、なんだ、桃子さんか…

「お話中だと思うけど、その獲物を選んでくれると…。」

獲物？

桃子さんが大量の木刀を持っているから…ああ、獲物って武器のことか！

「じゃ、これで！」

取ったのは長さが1m30cmくらいのものを1本だけ取った。

「えっ？そんな長いので良いの私からすればそこまでじゃ無いけど威月君からすれば、長すぎだと思うよ」

「ああ、大丈夫なんだなこれが、俺が使う技は刀が自分の体に合わない長さほど強くなるからな。」

「なら良いけど…。」

「おい早くしろ威月！！こっちはずっと待ってたぞー！！」

いつの間にか木刀を二振り持った恭也が怒鳴っていた

「じゃ、やるんで審判お願いします。」

「わかったわ、そのかわり危なくなったらすぐ止めてもいいのよ？」

「わかりました。」

「ああ、やっとだやっと試合が出来る。」

「そうですね！またせて申し訳ありませんね！」

「謝りなんていらさないさつさとやるぞ！」

「まあ、いいか。……葉波流二代目、対剣術用剣術取得者、葉波威月。」

「永全不動八門一派・御神真刀流、小太刀二刀術！高町恭也！」

「開始！」

その合図で試合が始まるはずだが始まらない。3人が見ているのは威月の方だ。まず格好が

「あの〜威月君？木刀仕舞ってさらに何でそんなだらけてんの？戦う気ある？」

「ありますよー。ただこの状態からじゃないと戦えないので始めて下さい。ちなみに25秒過ぎてますよ？」

「わかった。じゃあ最初から本気だっ！！」

神速！！

一瞬で恭也の姿が掻き消え威月の後ろに回る

恭也が完全に背後を取り

御神流 斬！

恭也の技が当たる瞬間

「ざんねん！はずれ！」

対剣術用剣術 基ノ奥義 天地逆転

横一回転で当たるはずの攻撃が回避されさらに後ろに回られ

対剣術用剣術 壱ノ奥義 鞘抜き

仕舞っていた木刀を体を回転させながら抜き当てるが

極限の神速！

「くっ！危なかった！」

「いえいえ、俺も驚きましたよ。あの連鎖は絶対に当たるんですが……」

「…美由紀。」

「…なに？母さん。」

「威月君の回避したとき見えた？」

「…全然。神速よりか早いよあれは…。恭ちゃんよく避けられたね
あの子の攻撃。」

「さてと、ではそろそろ……ギアを上げますか！」

対剣術用剣術 潜ノ奥義 地走添狩

地面とほぼ水平に体を倒し恭也に近づくが

猿おとし！

恭也の蹴りが威月に当たるとき

「まずっ！？」

威月は後ろに大きく跳んだ

「おかしいわね？」

「なにがおかしいのお母さん、いまのなのは真っ赤な顔？」

「それは後で原因を知るとして、今の回避法よ。」

「あれの何がおかしいの？」

「さっきの回避法よりか最初に使った回避法の方が良いはずなのよ。」

「あっ！確かに。……あっ、わかった……」

「何が？」

「最初に威月君は剣術用剣術取得者とか言ってたから、もしかして……」

「……もしかして？」

「威月君、剣術以外だと何も対処出来なかったりして……」

「……そんなわけがないでしょう？」

「そ、そうだよね！」

「それより美由紀？」

「何？」

「あなたの顔となのはの顔が同じことに成ってるんだけど？」

「えっ！？ま、まさか私が威月君にひとめぼれだなんて……」

「自分から告白してるわよ。」

「……………// // //」

「……………シヨタコン。」

「へう〜。// // //」

「せと、それについて恭也は気付いたようね。」

御神流奥義 雷徹！

ガッ！！

「ぐうっしまつたっ！！」

御神流奥義 猿おとし！

ドスッ！

『やべえ、当たった』

グリッ！ドキヤッ！

「ガハアッ！！」

御神流奥義 雷徹

「ストップ！そこまでよ！」

「母さん！」

「…桃子さん。」

「試合終了よ。…それと威月君？知っててやってるの？」

「…試合するための約束ですか？」

「ええ、そのとおりよ?」

「残念ながら今の今まで忘れてましたね。」

「へ〜…ならこの試合の勝者は、葉波威月とする。」

「なっ!何でだよ母さんこれは俺の「あなたは追い打ちで普通に死ぬるような雷徹を当てるのかしら?あれが威月君に当たっていたらどうなっていたかしら?」……………」

「それにあなたが威月君に試合を申し込んだとき、威月君は剣を使う試合ならするって言ったのよ?あなたはさつきから武術のみ剣は使っていないわ。だから貴方の反則負けに成るのよ。」

「強さを求めた故に周りが見えなくなつて大切なものを失つてしまふ。力の欲に負けた道を恭也?あなた歩きそうだったのよ?それと嘘を吐いてた威月君?君には後でじっくりお話があるからね?」

「何のことだ?俺は嘘なんか?」威月君は嘘をつくとき目の瞳孔が不自然に開くの知つてた?」……………」

「とりあえず、この試合は威月君の勝ちで終わり。威月君は私の部屋に連行で…。」

「……………母さん」

「何?恭也?」

「俺、御神流をやるの、止めるよ。」

「へえ〜どうして？今回の事で俺は周りが見えて無いことが分かったよ。父さんが入院してから自分を鍛えて、鍛えて。それで、なのはを全然見ていなかった。だから、俺は自分の周りがちゃんと見えるようになってからまた、始めるよ。」

「そう、ならそうしなさい。その道が恭也の守る為の力を得るのに安全で近い道よ。」

「わかった。ありがとう母さん。」

「さて、本当にお礼を言うのはお母さんなのかなあ〜」

「えっ？」

「じあ、お母さんは威月君を部屋に連行するから。なのはと美由紀は寝てるから朝ご飯が出来るまでそつとして置いて？じゃあね？」

「あつ！ちよつと母さん！……それにしてもどうしたらこんな風になるのは顔が真っ赤、美由紀は鼻血を出しながら、なのはと同じく顔が真っ赤いったいどうやって……まさか威月の奴！！」

「それで？威月君は、こつ成る事を予想して恭也と試合をしたの？」
「その前に桃子さん。この縄を解いて貰えませんか？さすがに怪我人にとってこれはヒド」答えなさい「わかりましたからその包丁をこつちに向けんなじゃないです降ろしてくださいお願いします桃子さん！」

「そっきの質問は？」

「ぜんぜん考えていませ」スチャア「考えていました考えていましたお願いですから包丁を降ろしてください」

「私はね…？嘘がきらいなんだ 次は、もしかしたら手が滑っちゃうかも」

ガタガタガタガタガタガタガタ

「でも、凄いわねえ？恭也を怒らせて、試合をして、私が気づいて言わなきゃいけないのにそれをやってしまっただからねえ？」「俺が元々居た世界でそう言う奴が多かったからわかつたんです。誘導方法は全部恭也さんと同じです。まあ武術で来たときは死ぬかと思いましたがナイスタイミングでしたよ桃子さん。…？桃子さん？」ポタリ…ポタリと涙が頬を伝わって床に落ちる

「ありがとう。恭也を救ってくれて。威月君が居なかつたら恭也は力に狂つてたかもしれない。だから、本当にありがとう。」

「いえ、最終的に桃子さんが一番偉いですよ。桃子さんじゃなかつたら出来ない作戦でしたから…。そして桃子さん？質問には答えたからそろそろこの縄を…」それでね質問なんだけどつ「誰か！！助けてえー！！」

「威月君はなのはと美由紀どっちが好き？」

「……………はっ？」

「答えなさい？答えなければ……………ニコッ」

「いや、好き嫌いとか言うほど話してもないからなあー。ドツチかつて聞かれたら美由紀さんかなあー。」

「だってー、良かったねー恭也？なのはじゃ無くてー！！」

ガタンッ！！

「待ってよ〜威月く〜ん／／／／／」

ふふふ、この家も二日でこころまで変わるのね。私も変わる。だから早く帰って来てね。” 土郎さん”……毎日面白い日に成るわよ。

第三話 主人公は以外と計画的（後書き）

ご指摘に感想お待ちしております。

第四話 病院って、なんか微妙にそわそわする。(前書き)

お待たせしました。

ネタが全く思いつかないし眠いし、考えてたら鼻血まで出てきました。

第四話 病院って、なんか微妙にそわそわする。

高町家食卓 7時28分

「まあ、落ち着いた所で聞くけど（もぐもぐ）、恭也さんのお父さんってどこにいる？（もぐもぐ）」

「まず、威月君は食べるか喋るかどっちかにしてくれ。」

「（…じく）…でどちらに？」

「…その話はちょっと違う部屋でしようか。」

えっ？ ああ、訳ありか。

なんか、恭也さん以外の雰囲気が暗くなってるし…

「わかった。じゃ、恭也さんの部屋で。」

恭也の部屋 7時30分

「父さんは、仕事で意識不明の重傷で病院だ…言っただけでなかつたことが悪いがあんまり父さんの話をしないで欲しい。」

意識不明の重傷ね…。

「たしか、名前が士郎さんか。」

めんどいけど、地球の本棚で検索するか。

「ちょっと恭也さんもご招待」

「何のこと、っ!？」

「いらっしやい。ここが俺の能力の地球の本棚だよ。」

「たしか、意識不明なんだよね、土郎さんって。もし、治せたら、俺の相談に乗ってくれるか？」

「…まあ、治せるならそのぐらいは」

「ヨツシヤアア！キーワード！高町土郎・意識不明・治療用魔法・最速！」

「何をしてるんだい？威月君？」

「まあ、見てて下さいよ、あつ！本棚には触らないでくださいよ！本棚が移動を開始し虚空へ消え、新たな本棚が現れ一冊の本が出てきて俺の手に飛んできた、土郎さん専用の治療用魔法集だ」

「よっ！と、一回で検索完了したな。」

ぺらぺらめくっていったが

なんだこれ殆どデバイス無いと出来ねえ。

「くそ、キーワード！高町士郎・デバイス不要・治療用魔法・最速！」

その後、キーワードを変えること三回目ついに

「よっしゃあ！来たー！！これで行ける！やったよ恭也さん！」
ふりかえると、青い顔をしてグツタリしている恭也がいた

「…初めてはキツイからな、ここは。母さんのグツタリした顔を思い出したよ。…検索終了。」

白い空間が消え、元の恭也の部屋に戻り

「大丈夫か、恭也さん。」

威月は話しかけた

「…返事がないただの屍の様だ。」

そうだ！だったらさっき調べた魔法を使えばいいか！ つまりは、
モルモット。

「じゃ、早速…。えっと、確か、こうやって」

空間に輝く指で魔法陣を書き

「求めるは癒し手>>>・疲射！」

恭也の体が輝き、顔の青白さが消えた。

「ありがとう、さっきのにも驚いたがまさか魔法なんて物も有るなんてな。」

「ああ！これで分かったか？とりあえず、これで士郎さんを直しに行くから病院の場所を教えてくれ。」

「いや、同行するから着いてきてくれ。」

「さんきゅー、後さあ。」

「なんだ？」

「後でなのはちゃんと話させてくれないか？朝飯前に話そうとしたら赤くなつて話してくれないんだよ。」

「…そう言えば、威月君はなのはの遊び相手として家に来たんだよな、…わかった、後で俺が仲介人になってやる。だけど、1つだけ言うておく」

「なに？」

「なのはは、やらんぞ？その代わりに美由紀は良いが。」

「美由紀さんと一緒に居たら何かを奪われそうだから遠慮します。ちなみに、なのはとは遊ぶだけですよ。」

「なら良いが…まあ、着いてきてくれ。」

高町家から移動、土郎さんの入院している病院の病室

「うわぁー、軽く見たけど酷いなあ、ボロボロだよ？こりゃ何回か掛けねえと。恭也さんは誰か来ないか見てて下さいね！」

「わかってる。廊下には誰も居ないから初めてくれ。」

「わかった、誰か来たら言えよ？」

魔法陣を空間に書き

「求めるは癒し手>>>・疲射！」

土郎さんの体が輝くが1回じゃ足りなく目が醒めない。

もう一度、魔法陣を書き詠唱するが目覚めない

もう一回、もう一回と何度もやるが、まだ目が醒めない、威月が苛つき

「だぁー！！いい加減に！起きろ！！！」

バチーン！！と大きな音を出し土郎の顔を叩いた、すると…

「ううう、なんか頬が火傷したみたいに痛い…」

「……よつつつしゃっ！！治ったっ！！！」

「うん？ここは病院か？」

「父さん…。」

「恭也か…、わたしはどうしてここに？それとみんなは？」

「それは…」

〈説明中〉

「そうか…、わたしがいない間に苦労させてしまったな…」

「じゃあ、父さん、この子にお礼を言ってあげて、怪我を直したのは威月君だから。」

「そうなのかい？威月君ありがとね。感謝するよ。」

「いいえ、どういたしまして…ところで恭也さん。約束の方を…」

「ああ、相談だよね、どんな相談だ？」

「それじゃあ聞きますけど…」

「最高の復讐の仕方ってどんなのですか？」

「どういう事だい？」

「いやいや、数年後、いや、それ以上先かも知れないけど、死んだ妹の敵に復讐しようと考えまして、今まで考えた案が血反吐が出るまでくすぐるのと、永遠に逆立ちをさせて鼻に炭酸ジュースを入れるのが在るんですけど…良いのが思いつかなくて。」

その復讐の内容に恭也と士郎は

「はっ？」

と驚いた。

士郎が

「威月君…君って復讐の意味を知ってるかい？」

「そんなもん、知ってるよ。相手にやられた後にやり返すことだろう？俺も一応人間なんで殺したくないんですよ。まあ、ご本人が出てきたらどうなるか分からないけど…。それでも、殺す以外の事でなんとか償って欲しいんですよ。だから、殺す以外の復讐法を教えてください。」

「…まあ殺すとかだったら俺は威月君を殴ってたが…。殺人以外で良いんだな？」

「はい！」

「今度紙に書いて置くからまっしてくれ」

「ありがとう！！恭也さん！！」

「話は終わったから、家に帰って母さん達に伝えに行くぞ。」

「恭也。桃子によろしく言っといてくれ。」

「わかったよ、父さん。」

「お大事にね、土郎さん。」

さて、桃子さん達が知ったらどう驚くかなあ

そう期待しながら家に帰る威月であった

第四話 病院って、なんか微妙にそわそわする。(後書き)

原作開始まで目は使わない様になりました。次回から時間を飛ばしながら書いていこうかと、さすがに二日間これでいっばいっばい。

時間的に一年生位まで飛ばす予定です。ちなみに入学後はなのはのシーンを多く入れます。

指摘や感想を待っています。

第五話 絡み酒は怖い（前書き）

友達とゲーセン行った。友達が鬼畜な事しかしなかった。
哀れ、敵の人たち、そして、さらば俺の数少ない小づかい達よ。

第五話 絡み酒は怖い

士郎さんを治してから色々大変だった

治った事を俺達から聞いた桃子さんが仕事中に泣き、

仕事が十数分出来なくなり、恭也さんが仕事をその間手伝った。

なのはちゃんも手伝いましたよ？

ケーキのスポンジが入ったオープンを見てくれました。

俺はどうしたかって？軽いトッピングを任せられたけど、

途中から何故かケーキがポイズンな料理に変わったので、レジ打ちに回されました。

（このケーキは、後でスタッフが血反吐を吐きながら美味しく頂きました…。）

その後、桃子さんが復帰し、なんとか本日の営業は終了。

翌日は臨時の休業で退院する士郎さんを迎えに行くそうだ。

（実は士郎が寝ているだけで、二回で意識が回復した魔法を何回も掛けたので傷すらも回復していた。

なので、その翌日に退院してよいと連絡が営業が終了した直後、病院から届いたのだ。

その翌日、連絡通り、傷跡一つない士郎さんと恭也さん以外の家族が涙の再会を果たした。

士郎さんが俺をみた際に治したことをバラそうとしたが、恭也さんが口を塞いで耳打ちで内緒にしてくれ、と頼んだそうだ。

ちなみに、その後、翠屋（桃子さん達の店）で盛大に退院おめでとうパーティが行われた。

しかし、桃子さんと士郎さんが一緒にお酒を飲んでいる時、どこにあったのか、美由紀さんがジュースと間違え、なぜか、スピリテュス（度数は96%火気厳禁なお酒）をコップに注いでいた。

何でここにそんなのあるんだ？と置いていたら士郎さんの座っている所のテーブルに一本あった。

つまり二本だけスピリテュスがあるけれど、危険な差があった

士郎さん達・水あり成年越えてる

美由紀さん・水なし未成年

この後、美由紀さんがジュースだと思って飲んで一瞬で酔っぱらった。

気絶しないのが不思議だ。けれど、酔っぱらわない代わりに俺に抱きつき、

絡み酒になつた美由紀が酒を俺にも飲ませようとしていた。

嫌がつている俺を見たのはが止めに來たが返り打ちに合っていた。
死んでないだらうな？

と思うぐらいに動かなくなったのはを見ていると

恭也が倒れているのはちゃんを見て美由紀さんを俺から引き離そうとする

けど、何故か起きたなのはちゃんが恭也さんを突き倒し、

その隙に美由紀さんが恭也さんの口に

スピリテュスを流し込み、恭也さんが酔いで寝てしまった。

だが美由紀さんが恭也さんにスピリテュスを飲ましてる間に俺はコッソリ離脱し士郎さん達に助けを求めようとするが

二人とも何故か寝ていて起きる気配がない

すると、後ろからトントン…と肩を叩かれる。

ゆっくり後ろを振り返るとそこには

確実に百人中百人が、『へっへっへ、目がまるで飢えた獣のようだ！』と言える目をした二人が居た。

その日の事をそれから先覚えていない。
ただ目が覚めたとき、服がベタベタするのと、
隣でなのはちゃんと美由紀さんが顔を赤らめながら寝ている事だけ
を俺は覚えてる。

その日から美由紀さんは俺の就寝中に音もなく近づいて俺を美由紀
さんの抱き枕しようとしたり（未遂）、

なのはちゃんが俺の指を自分の指に絡めようとしたり（未遂）、

恭也さんの仲介無しである意味なのはちゃんと仲良くなりすぎて恭
也さんが怒るのではなく、拗ねて部屋に隠ったり、

俺やなのは達を見た土郎さん達が『威月君には、出来れば二人とも
貰ってほしいなあ〜』なんてことを言ったりして…

一応言っで置いた『俺！魔法使い目指してるんだ！！』結婚する気
はあまりない。

魔法使いと結婚はだいぶ違うが…。

ちなみに魔法使いの意味が分からなかったら自分で探してくれ

途中、恭也さんが葉波流のことを土郎さんに教えて興味を持った土
郎さんが、

『是非、見せてほしい』と言ってきた、なので道場で今回は木刀の

みで試合をした。

ちなみに言うまでもなく、俺が今回勝った。ただ恭也さんが『くそ〜木刀使わなきゃ勝てるのに〜』などを言ったから

士郎さんに理由を聞かれ剣にしか対応できないと言った所、

なんと、万能型に出来るように一緒に葉波流を改造しようと言われた。

しかも、『威月君とは家族とも言えるからね御神流も教えてあげよう。』とあり得ないほどラッキーな事を約束してくれた。

ちなみに、入学する前に何とか葉波流を万能型にする事が出来て、今なら敵の武器が剣でなくとも避ける自信がある、

いわゆるチートだ。それに全能眼だが何とかHow toを聞く事が出来た。

だがこれはチート過ぎる。

下手をすれば、かは波を打つサヤ人を睨んだだけで殺せる。

でも、リスクが高すぎた。

目を潰してる最中、

葉波流と御神流が使えない、

全能眼の完全起動まで数秒さらにその数秒間、

失明して周りが見えない。

使えたとしても反動が強い奴もあるから強いのも使えない。

そんな目だ。

ちなみに俺が入学するまでに悲しかった事が、あれから一回も桃子さん達が調理場に入れてくれない事だ。

お陰で、飲み物も取らせてくれない、前に一度、

みんなが出かけてるときに料理を作ってたら、

みんなが帰ってきた瞬間、土郎さん達みんなが俺の料理の”匂い”で倒れそうになり、

俺はキッチンにトラップを仕掛けられるほどの調理禁止令がでた。

その数日後、俺となのはは聖祥大付属小学校に同じクラスで入学した

第五話 絡み酒は怖い（後書き）

主人公まじでチートです。

ちなみに次回から、くぎゅが声優の人がきます。

フラグ？立たせるに決まってる！

でも何か、現状からフラグ立った瞬間キャラ崩壊が絶対起きます。

注意して下さい。後、なのはは、次回喋ります。
では。

第六話 入学式の校長の話は特に長い（前書き）

出来ました…。

第六話 入学式の校長の話は特に長い

入学式当日

俺となのはちゃんは学校の制服とカバンを土郎さんと桃子さんに貰い私立聖祥大付属小学校に足を運んだ

実は言うと、この学校、私立校なだけに入るのにテストの様なことしたのだが、…簡単すぎて目が回りそうになった。

入学式だから当たり前に土郎さん達が今日の日の為に店を休業にしてくれてまで、着いてきてくれた。

それは、とても嬉しい。だが、学校に行くまでに俺に必要以上に体を寄せてくるこの

美由紀さんは留守番にして欲しかった。

桃子さんからだと美由紀さんはシヨタコンだつて聞いたが、絶対に美由紀さんはブラコンだと思う。最初は近所の子に目を光らせていたが、二日過ぎたら俺にしか反応しなくなった。高町家はこんなのか居ないのか？

私立聖祥大付属小学校入り口前

〈現在8時11分頃〉

美由紀「威月君！威月君！ツーショット撮ろうツーショット！」

威月「……」。土郎さん、美由紀さんを新しい剣術の実験台にして良

いですか？」

士郎「ウザいと思うだろうが我慢してくれ、それと、ここであれを使わないでくれよ？危ないから。」

威月「ちっ！！」

美由紀「ツーショット！ツーショット！」

威月「…あとで撮ってやるから静かにして下さい美由紀さん……！！」

美由紀「……………」

ふう、やっと静かになった。

そう思いながら学校の敷地に入っていくと

『おい知ってるか。今年の小学一年にあの、バニングス家と月村家の娘が居るんだってよ。』

『本当か！？これは、凄いいことになったな！つまりはあのバニングス家か月村家の娘さんに誰かがくつついたとすれば…。』

『ああ、一気に大金持ちになれるぜ！』

『くう〜！！俺の息子とくつつかねえかなあ〜』

屑だなこいつら、金なんてそんなに要らないだろ、生きるために必要なだけの金があれば良いのにそんな死んだら余る金なんてねえだろ。金稼げる年なのになんでそれが分からないのか。
おっとそろそろ教室に行かなきゃな

威月「お〜い、なのはちゃ〜んそろそろ教室行かないと入学式初日から遅刻になるぞ〜！」

なのは「え〜〜！！それは困るの！！早く威月くん教室に行こうよ

「!!」

威月「わかってるよ。じゃ、士郎さん達、また体育館で合いませう！ほら行くぞ！なのはちゃん！」

なのは「ああ〜！ちよつと待ってよ威月くん！」

士郎「じゃあ、早速体育館に行くか。」

桃子「そうね！なのはの晴れ舞台だものね！」

恭也「そうだね、母さん。…美由紀？威月は静かになって行ってたけど、そこまで静かにしなくても。」

美由紀「うるさい恭ちゃん！威月君とのツーショットの為なら私はプライドもなにもかも捨てられる」 カンペ

恭也「…威月君の料理食べるって言われたら？」

美由紀「ツーショットを諦める！」

『『『『あれは地獄だ!!』』』』

そう士郎達は思った。

威月達の教室　〜現在8時36分〜

威月「なんとか間にあって良かったな。」

鞆を机の横に掛けそう呟く。

威月「なのはちゃんとここから近くて良かった。」

これで思う存分

昼寝ができる。

何とかなのはちゃんが担任を説得させるだろう。

ガラッ!!

担任「ゴメンネー！遅くなっちゃった。じゃ、出席取るからねえ、ついでに先生に自己紹介してねー!!」

うわっ!うざ!

まあ良い俺の番はもうちょい先だし、その間寝ているか。

『わたしの……はア……サ・バ……グ……よ。これ……らしく。』
『えくとわ……は高町……です。好きなものは……くん。嫌いなものは……です。』

『わ……のな……は、月……』

担任「葉波くん？起きなさい！君の番だよー!」

威月「……えっとー。葉波威月だ、得意なものは剣術、好きな物は家族愛、嫌いな物は人間です。宜しくそしておやすみ。」

担任「お〜い！勝手に眠るな〜!」

威月「おやすみな、サイ」 ポポポポーンな奴

担任「魔法の言葉を悪用するな〜!」

体育館（たいくかんじゃ無いぞ！たいくかんだからな！）　（現
在9時23分）

俺達が体育館に移動してイスに座った瞬間、入学式が始まった。

校長『わたしが私立聖祥大付属s（カットされたよ！）と言うこと
で頑張つて下さいね？』

パチパチパチパチ！

ああ長かった、寝てて良かった。十分くらい喋つてたなああの校長。

『次に一年代表による挨拶、A組、葉波威月君。』

アレ？なにこれ？前出て挨拶言えばいいの？

威月『…ええ、みなさん入学おめでとうございます。社会が腐って
いく時代に君たちが生まれこの学校に入学出来たのは幸運です。こ
んな社会だからcos（以下略！）もう一回言います、入学おめでと
う！』

『……………。』

アレなんかまずった！？完璧だと思ったのに！？

『うおおおおお！！！！』　　ぱち！ぱち！ぱち！ぱち！ぱち！ぱ
ち！ぱち！ぱち！ぱち！

うおっ！大喝采だよ！すげーさすが俺！

美由紀「また、惚れ直しちゃた／＼／＼／＼／＼／＼」

その後無事入学式が終わり、美由紀さんと写真を撮り、家に帰宅し

た。

桃子「あつー！ケーキ用の卵と牛乳と砂糖が切れてて、晩ご飯用の
お肉とお米と味噌とお醤油が切れちゃてる。」

威月「おい待て！桃子さん！少し…いやかなりの量を切らしてない
かい!？」

桃子「そうなのよ。だから威月君？お金渡すからケーキの材料を買
ってきてくれないかしら。」

威月「…まあなのはちゃん為に買ってきてやるけど、美由紀さんが
またトリップしてるから治しておいてくれ。」

桃子「威月君が治すのに一番良い人なんだけど…はいお金。」

威月「いや、まだ誰ともつき合う気は無いからな？じゃいつてきま
ーす!！」

高町家を出て数分後、目的地であるスーパーを目指し公園を横切っ
ていると

「キヨロキヨロ」

威月「なんだあいつ、確か同じクラスの…」

キキッー！！バツ！バタンツ！！ブロロロツツ！！

威月「ほう…、誰だか知らないが新しい剣術を使う人間が居たじや
ないか、人助けだから手の一本や二本ぐらい無くなっても大丈夫だ
モルモット

よな？追跡開始…」

神速ッ！！

第六話 入学式の校長の話は特に長い（後書き）

今回お知らせがあります。

なんと、まだこの作品が無印に達してないのにもう一作品書いてしまいました。あまり後悔していません。

なんとか両立して書いていこうと思います。

では、また明日。

第7話 ツンがヤンに変わったら一番怖いと思うのって俺だけ？そしてタイト

熱です、風邪です、頭痛がします！

何を書いているのか分からない。

始業式の校長の話も分からない。

色々おかしいですがどうぞ！！

第7話 ツンがヤンに変わったら一番怖いと思うのって俺だけ？そしてタイト

～車の中～

男1「にしても、上手く行ったな。」

男が言った

男2「ああコイツが聖祥大付属小学校に入る瞬間狙ったからな。」

男3「それにしても、俺コイツ見るとヤっちまいたくなるぜ。」

男2「おいおい、何おまえだけ楽しもうとしてんだ？」

男1「ちょっと待て、さすがに車の中だけ？アジトに行ってからにしろよ、ちゃんとコイツの家に脅迫ビデオを送った後やっても良いが。」

男3「マジかよ！？やったね！」

男2「ああ、早速アジトに戻ってビデオ作ったらやりまくろうぜ！」

～アジト～

古くさい廃墟のビルが男達のアジトであった

男1「…この通り、お前等の娘は俺達が誘拐してやったぜ？返してほしけりゃ、ビデオと一緒に送る手紙に書いてある口座に金を寄越しな！！」

男がビデオの録画のスイッチを切った瞬間別の男が

男3「よし！撮り終わったな！じゃ早速…」

男2「バカ、早いよお前は、俺にやらせるよ。」

男3「はあ！？嫌に決まってるだろ、何で俺がお前が使った後のを使わなきゃならないんだよ。」

男2「ちっ！！…まあこうなったらテメエは聞かねえからな、今回だけ譲ってやるよ。」

男3「おっ！マジか！サンキュ、んっ？ハハハコイツ泣いてやがるぞ、バカだなあそんな事しても逆にやる気が出るだけなのによ。」

そう男が手を伸ばしたとき

木刀が一本男の腕に飛び貫いた…ブシユユ！…と音と共に男の腕から血が噴射した

男3「……………は？」

男の腕から血が噴水のように吹き出した

男3「ギヤヤヤ！！腕があああ！腕があああ！！」

威月「おっと、複雑骨折くらいにしようと思っただが…案外無理みたいだなこの剣術…。」

男2「おい！大丈夫か！？このガキ殺してやる！」

ガチャ！！と男が銃を構えた

威月「惜しいなあ、すっごく惜しい！それが拳銃じゃなくてマシンガンだったらまだお前らが勝ってたかもしれないけど…」

男2「死ねえ！！」

男は話も聞かず銃を撃った

ガン！ガン！ガン！と銃声が鳴り響く
俺が今持っているのは木刀のみだ、マンガや小説みたいに銃弾を刃
で防げる筈がない…

そう”刃”だったら駄目だった

カン！カン！カン！と言う風に弾丸が床に落ちた…

銃を打った男もありえない事が起こって慌てている

威月「まあ葉波流の万能型だが…あえて名付けるなら奔嶺流ほんれいかな。」
いや、銃弾って案外早いんだなあ、今更だけど、木刀で人って切れ
るんだな。」

男2「あり得ない！銃を木刀で防ぐだなんて！普通折れて使えなく
なるんじゃない…」

威月「答えてやろう。確かにお前の言う通り普通は木刀が折れて使
い物にならないだろう、ただし、それは馬鹿正直に刃で防いだとき
だけだ、俺の場合は柄頭で弾いたんだがな。」

簡単な話だ、銃弾が威力を發揮するのは正面に対してのみ、

側面から叩かれれば方向を変えること位は簡単だ。

男1「くそ！来るな！来たらいいつの命がどうなるかガキでも分かるよな！」

威月「残念ながら、俺は馬鹿だから人質とかよく分からない、ただ俺を相手に武器を使うのは間違いだ。」

そう言いスタスタと男に近寄る、それを見た別の男が銃を撃つが意味がない

威月「じゃ試しだけでもう一回やるか奔嶺流 盗ノ型 融いたち」

高速で動き人質を取っている男の背後に移動する

男1「！！……？」

移動しただけなのだが、男は斬られたと思ったのだろう、体を触って確かめている

威月「この技は盗ノ型って言って盗って名前が付いてるんだけど何を盗んだと思う。」

そう、痛みも何もなく俺は男達が持っていたナイフと拳銃を盗んでやったまるで鎌融かまいたちのように…

威月「さあこれでお前達が持っている人質の命と言うアドバンテージは無くなった。

お前達は今から俺のモルモットとなる。

せいぜい逃げて一つでも多く技を出させてくれよ？

…奔嶺流 居合絶ノ型 蛇」

逃げる男達に対してまるで蛇のように追い
その木刀は確かに男達の首を打ち男達の意識を刈り取った

威月「おい、大丈夫か？それにしても金持ちってのは大変だな誘拐なんて…なあ、えっと…ア…サバークさん。」

アリサ「アリサよ、アリサ・バニングス。決して朝にハンバーグを食べるみたいな名前じゃないわ。」

威月「そっか、アリサ。俺は買い物に行かなきゃならない。自分で家の人を呼べるか？

俺、ケータイなくて…」

アリサ「大丈夫よ、助けてくれてありがとう、

…図々しく突然ですが…お願いします！

あなたに惚れました！！どうか子作りを前提に結婚をしてくれないかしら／／／／／／／／」

What!?!??

威月「待て！待て！待て！色々おかしいぞお前！？普通は結婚を前提に…だろ！なんで子作りが前提なんだ！？て言うか結婚自体もおかしいけど!？」

アリサ「好きなんだからしょうがないじゃない…それが駄目なら…フフフフ。」

ゾクッ!?!?!?!?!

ヤバい！アリスから美由紀さんと同じパワーを感じる…。

俺：知らね！！

この後、逃走したのは良かったが同じクラスなのでまた会ってしまうのは今後の話

第7話 ツンがヤンに変わったら一番怖いと思うのって俺だけ？そしてタイトル

威月「…作者、ちょっと出てこい。」

作者（湯）「えっ？イヤに決まってるじゃん。」

威月「そうか、残念だここに青森県産の本マグロがあるのに…」

作者（湯）「それを早く言えよ」かかったな。「えっ？」

この先はグロテスクシーンが多々ありましたので消去されました。

、>u<）何すんだよ！？

威月「えっ？何キモイ。」

この先はグロテスクシーンが多々ありましたので消去されました。

・・ 作者（笑）

威月「読んでくれて有り難うじゃーな。」

番外編 料理始めました（前書き）

遅れました。

この話は番外編です。
なおヤンデレが出没するので
ご注意ください

番外編 料理始めました

学校のこと...

担任「今プリントで渡すけれど、来週の火曜日は

”調理実習”です」

なのは「にゃっ!!!!??」

威月「!!」

担任「作るのはみんなが大好きなカレーよ？エプロンを忘れないでねえ〜。」

場所が変わりなのはの家翠屋

士郎「.....」

桃子「.....」

恭也「.....」

美由紀「.....」

なのは「.....」

「『『『『人が死ぬね…』』』』」

士郎「神様は僕たちに死ぬと言いたいのかな。」

そう言う士郎の前にはプリントがあった

内容にはこう書いてあった

”保護者同伴”でカレーを作ろう！！

美由紀「こうなったらこの前買った威月君用の睡眠薬（時価五万円）を当日に飲ませるしか…」何に使う予定だったかはご想像にお任せいたしますby作者

なのは「威月さんの料理を食べられる人は絶対に居ないの…前に見たとき（調理禁止令前）家中の虫とかまるでバルサンを掛けた時みたいに死んでいったの…」

美由紀「私の部屋の虫も死んでた…ある意味嬉しいけど、私も死ぬかと思った。」

恭也「ところで、威月君は？」

桃子「…部屋でカレーの本を見ているわよ。」

恭也「い…イヤだ…あんな物を食べたくない…！！！！！！」

桃子「恭也！！逃げるなんて卑怯よ！！それだったら私も逃げる！

！士郎さんも！！！！」

士郎「解った数日間一緒に旅に出よう！！」

美由紀「ああ！！みんなセコい私も逃『ガシイ！！！！』げ……」

なのは？？」「…お姉ちゃん？まさか…かわいい妹を置いて、逃げようだなんて、考えてないよね？………ねえ！！…お姉ちゃん！！！！」

美由紀「ひいひい！！！！ガクッ。」

調理実習当日

美由紀「うう、悪魔な料理が出来ていくよ、これただの食材しか使っていないのに……」

なのは「……………」

美由紀「なのは？気絶したフリは私には効かないよ？」

なのは「ちっ……」

美由紀「なのはもグレるし……」

威月「やった〜！！出来たぞ〜！！」

美・な「！？」

番外編 料理始めました（後書き）

次回からは無印編！

と言いたい所ですがもう一度番外編をやりたいと思っております。

とある作者様とのコラボをやりたいと…

すみません、番外になります！！ 作者様に向けて

では、また次回…

番外編 コラボ特別版（前書き）

今回はなんと”コラボ”です!!

パワード・マウンテン様の作品
元神魔王リリカルなのは外伝E デルタソウルタイパース p i s o d e 1 1 1 起源――

との協力の元で書きました

結構内容変わったけど…

では、どうぞ!!

番外編 コラボ特別版

もしもジロウがこの世界に来たら・・・

今日は変な夢を見た・・・

俺と男の子が戦う夢だ・・・

それは、普通の夢を見ているときに起きた。

威月「！？なんだこれは！！周りが崩れて・・・」

俺の周りの夢だった空間が一瞬にして黒い空間に変わった

最初は魔王と再会するのかと思ったが、黒い空間の奥から一人の男
…いや、少年や男の子と言った方が良かったかもしれない

ジロウ「やっと人に逢えたか…いい加減この真っ黒いには飽きた
からな…」

威月「おい、その人…誰??一応ここ、俺の夢の中なんだけど…」

ジロウ「ああ、それはすまない…あつ私はエミヤ シロウだ。ジロ
ウって呼んでくれ」

威月「なんで名前がシロウなのにジロウって呼ばなきゃいけないん

だ・・・

まあ、ジロウさん、早いところ出ていってくれ、夢を見て心地よく起きたいんだ、

まあこれが夢なのかもしれないけど・・・」

ジロウ「ああ分かつ!?.....すまない、どうも、ただで帰るわけにはいかないようだ・・・」

威月「は?...なに言って、「トレース・オン」!?」

ジロウ「行くぞ!!!天羽ヶ弓!フルンディング!」

ーバット・エンド・ショット!.....

ジロウと名乗った奴の弓から赤い弓のような物が出てきた...でも

威月「遅い!!」

いつの間にか持っていた刀で、矢を側面を叩き狙いを外す

しかし、後ろにはじきいた弓は、俺に向かって再び襲いかかってきた

威月「くそっ!!!西、無、陣、陽の向きから光輝を生み出す!!!」

俺が作った魔法が矢に当たり爆発した、

結構な魔力を込めたのだから壊れなければ泣いていた

ジロウ「そこっ!!!」

威月「なっ!?!」

いつの間にかジロウが剣を持って切りかかっていた、が...

――対剣術用剣術 基の奥義 天地逆転！――

ジロウの剣が当たる瞬間に体を回転させジロウと俺の位置が逆になった…

威月「終わりっ！！」

――御神流 雷徹！――

完璧に後ろを取り終わったと思ったが…

ジロウ「後ろだよ…」

――ブローケン・ファンタリズム――

後ろから急に剣が迫っていてジロウが指を鳴らした途端、爆発した…

威月「ガハッ！ガハッ！ゲホゲホ、……………死ぬかと思った…」

ジロウ「すまない、命令でやらなきゃいけなかった、もうやらなくても良いんだが…」

威月「良いよ別に…どうせ夢の中だ、逆に楽しめたよ、それじゃ！じゃあな！俺は起床の時間だ…」

いい加減起きようと思った時…

ジロウ「ちょっと待ってくれ」

威月「何だジロウ？」

ジロウ「いや、図々しいと思うが…俺を元の世界に戻るための魔法ってあるか？」

威月「つまりは返還魔法か…ちょっと待ってる、…地球の本棚…」

く待つこと三分く

威月「あつたぞ、まあ行けるかどうか微妙だが…」

ジロウ「ありがとう、恩にきる」

威月「まあ行くぞ…我は知る、彼の者の過去、彼の者の業を、彼の者を罪として地獄の淵へ送る者…それは我ぞ！送り返せ！！閻魔の判決！！！」

ボンツ！！と音が鳴りジロウが居なくなった

威月「まあ、できる限り彼奴の平行世界と融合しないでくれよ…」

ここで、俺の変な夢は終わった…

番外編 コラボ特別版（後書き）

こんな出来でした!!

自分的には良いかなあ、と思いました!!

パワード・マウンテン様!!

どうでしょうか？

後書き：質問コーナー等をやりたい作者です。

質問などありましたら、活動報告に質問と張っておくのでそこに疑問を書いて下さい、お願いします…

感想ご指摘お待ちしております!!

では（・・・）ノシ

第八話 私が歩く理由…そして始まりの話（前書き）

無印キターー！！！！！！

では、どいぞうじ…！！

第八話 私が歩く理由…そして始まりの話

私には”お兄ちゃんが居た”

優しくかった”お兄ちゃんが居た”

カッコいい”お兄ちゃんが居た”

私の大好きな”お兄ちゃんが居た”

私に魔法を覚えてくれた”お兄ちゃんが居た”

お兄ちゃんと、私と、お母さん、そして飼い猫のリニス…

それで、私たち家族というものだった…

みんなで遊んで、笑って…そんな、あつたかい家族が私達で私達だ…

でも、ある日それはガラスの様に割れて砕けた…

私はその日の事をあまり覚えていない…

覚えているのは…私の目の前で必死に障壁を張って最後には塵も残さず消えていった…

お兄ちゃん

お母さんから聞いた話…その日から私は随分と寝ていたようだ

あの日の事件はお母さんが必死に…

そして、調べた結果…

” 時空管理局が起こしたものだ” だと判明した…

お母さんはあの日から変わった

部屋に良く居ることが多くなった

本を一日中読んでる事なんて普通で、偶に一週間起きてる事もある

それが続いたある日…

お母さんがあるものを見せて話してきた

— アルハザード —

お母さんはアルハザードがあつたら…

お兄ちゃんを生き返らせるかもしれない…と

お兄ちゃんとまた会えると…

たとえば、血が繋がってないお兄ちゃんでも、私にとって

とても、とても、とても大事で、大好きで…

そんな、お兄ちゃんに会うためなら”フェイ”は何でも…何でもするよ…

それが、私の生きる理由であり、歩く理由…

そのためにも、お母さんに言われた通り、ジュエルシードを集めないと…

〈魔法少女リリカルなのは本編の始まり〉

第八話 私が歩く理由…そして始まりの話(後書き)

誤字、脱字や感想待っております。
では、(・・)(・ノシ

第九話 前に進もうとして前に行くんじゃない、後ろに行きたくないから、前へ

皆さんも思いませんか？

人を感動させたい、共感を持って欲しいと…

次から前書きで一つ名言？を書きたいと思えます

第九話 前に進もうとして前に行くんじゃない、後ろに行きたくないから、前へ

「三年生になったある日」

「????『ジュ……ル……ド……印……!』」

少年は手にしている赤い宝石を前に出し、そう言った
魔法陣の様なものが手から、いや宝石から飛び出し
そこに変な物体がぶつかった……

その後、少年は倒れ……

威月「はっ!?!……なんだ……夢か……変な夢だな」

でも、あの少年のあの宝石……あれって……デバイス……なのか……

美由紀「寝起きにびよ……ん……!」

威月「うわっ……!」

むぎゅゅゅ

美由紀「あ、あれ?何時もなら蹴られるのに……」

威月「……考え事をしてた……それといい加減離れる」

美由紀「…一応、相談に乗るけど……」

威月「無理だ…言ったとしても理解できないと思う…それより今日は稽古の日だろ？」

美由紀「あっ！やっぱり…恭ちゃん待たせてるんだった」

威月「たくっ…早く行ってこいって」

美由紀「ごめんね、じゃ！」

ガチャ！ドタドタドタドタ…

威月「…ドアは開けたら閉めるって分からないのかあいつは……」

……

威月「あっ、士郎さんに桃子さん、おはよう」

士郎「ああ、威月君、おはよう」

桃子「おはよう」

威月「ふあ〜…あふっ」

士郎「？…どうしたんだ？欠伸なんかして、昨日は眠れなかったのか？」

威月「うん…昨日はやけに多くてね…夜間パトロールってのも大変だよ」

桃子「今日ぐらい休んだら？」

威月「うん、そうするよ」

なのは「お母さんにお父さんおはよう！威月くんもおはよう！」

全員『おはよう』

なのは「あれ？お姉ちゃん達は？」

士郎「道場の方じゃないか？」

桃子「あっ、なのはお姉ちゃん達にもうすぐ朝ご飯って伝えてきてくれる？」

なのは「わかったの！」

～中略～

.....

学校に向かうバス内にて

なのは「すずかちゃん！アリサちゃんおはよー！…」

すずか「おはよう、なのは」

アリサ「おっはよー！」

すずか「あれ？威月くんは？」

なのは「…前の席だよ」

威月SIDE

「ふう〜、前の席なら個人席だし学校に着くまでに寝れるな…」
そして俺は目を瞑り寝ようとしたところで

アリサ「お休みとおはよようのキスは必要？」

威月「要らない、出来れば普通に寝させてくれ…お休み…」

アリサ「あ、あれ…ホントに寝ちゃった…普通に寝させるのは私の
役目…威月が寝不足なんだから／／／／／」

なのはSIDE

なのは「アリサちゃんって、偶に病んでたり、デレてたりしてるよね？」

すずか「確かあれって、ヤンデレって言うんだと思う」

なのは「ふーん、あれがヤンデレなの〜（棒）」
あっアリサちゃん鼻血出してる…

すずか「なのは、私の話、聞いてた？」

えっ？それはもちろん

なのは「すずかちゃん家の猫のお化けの話だったよね？」

すずか「やめて！怖いから！」

.....

〜学校にて〜

本日も省略させていただきます

〜放課後の帰り道〜

なのはSIDE

アリサ「むう〜」

「残念だったね、アリサちゃん…威月くん急用が出来ちゃって…」
まあ、私もちよっと残念かな…

「すずか「フフフ、まあ何時も一緒って訳にもいかないし、また会えるから良いじゃない」

「アリス「でも、私が威月を好き…いや大好き…いや愛してるのは変わらないから会えないのが辛いし…」

「むう…、友達だし励まさなきゃ!!」

「アリスちゃん!!」

「アリス「なによ、なのは…」

「愛と薬は個人差だよ!その時は無理でも確実に愛と薬は効いてくるから、きつとアリスちゃんの初恋は叶うよ!!」

「アリス「…ありがと、なのは………」

「まあ、初恋は実らないって言葉もあるけど…(ニヤツ)

「助けて……」

「!？」

「すずか「どうしたの?なのは」

「助…けて……」

「あっちからだ!!」

アリス「ちょっと!どうしたのよ!なのは!」

すずか「なのはちゃん!」

そこで私が見たのは、傷だらけの首に赤い宝石を持ったフェレットでした…

しかし、私は知らなかったのです。

このフェレットとの出会いが、私の人生を変えるものだ…

第十話 物事の原因なんてみんな後付けで良いんだよb y湯飲みの茶(前書き)

大変遅くなりました…

ではござ…!

第十話 物事の原因なんてみんな後付けで良いんだよb y湯飲みの茶

数時間前、夜…

なのは「……って事なの……」

なのはが今日あった出来事について語っていた…

森の中で動物…フェレットを見つけた…が、そのフェレットは怪我だらけで…

病院に持っていったそうだ…

そして、なのは達三人でフェレットについてどうするか…話した結果…

アリサ…家に犬が居るためNG

すずか…まあ誰だか知らんが猫が家に居るらしい

なので、家で飼えないか？と言うわけだ

士郎さん達はちゃんと世話ができるのか？出来るのであれば…

と言うわけで、家でフェレットを飼うことが決まったのである…

今現在

威月「ふうふう、夜間パトロールは今日は休みだし…久々に早めに寝よ…」

独り言を呟き、新しい部屋のベットに仰向けになる…

そう言えば、なのはが居ない…

……キイイイイイイ……

威月「な…なんだ今の魔力」

明らかに今の俺でも分かるぐらいの…

キイイイン

威月「また…でもこれはさっきのより小さい……」

桃子さん…パトロールに行かなきゃならないようです…

威月「我・契約文を捧げ・大地に宿る悪意の精獣を宿す」

「……?」心を通わせて下さい……

あなただけの魔法が浮かんでくるはずですよ」

白に近い茶色の動物は少女……

なのはにそう言った

なのは「……………」

なのはは、目を瞑り動物の言う通りにした……

『

! ! ! ! !』

そこに黒い物体……

物体と言っているが

目があり……口もありそうだが……

それがなのはに突っ込んで行く……

なのは「……………」

なのはは、それに対して手を動かし、自分の前に出した……

「……?」『ラウンド・シールド』

ガキイイイギイイイン!!

と、金属と金属が削り合う音が響いた……

黒い物質はなのはから離れ……

なのはが心に浮かんだ魔法を言おうとシールドを外した途端……

黒い物質が恐ろしい速さで突進してきた…

なのはは反応しきれず、シールドを張らず、その場でしゃがんでしまった…

なのはが持つてる杖がシールドを張ろうとするが…

威月『求めるは雷鳴>>>稲光!』

ズギイガアアアアツ!!!

と、黒い物体に向かい雷が落ちた…

なのは「ふえ…ふええ?」

????「大丈夫ですか!？」

肩に乗っている動物が聞き…

????「マスター!!」

持っていたデバイスは心配をしてくれた…

威月「たくっ…休みの日に限ってこうなる…
眠いなあ」

なのは「威月…くん?」

威月「ああ、立たなくて良いって…休んでろ…

おい！……え〜と、確か…モルモット！こっちに来い！！説明しろ
！」

???「モ…モルモット!？」

僕はモルモットじゃなく、ユーノです!!」

威月「じゃ、ユーノ…時間無いから聞くぞ？」

今のなのがアレを封印するにはどうすればいい?」

ユーノ「えつと…とりあえず、魔法による攻撃で動きを止めます！
魔法で攻撃したらジュエルシードの魔力が無くなっていくはずだ
!!!」

威月「ふ〜ん、つまり限界ギリギリまであいつから魔力奪えばいい
んだろ?」

ガチゲジュジュール…

ユーノ「再生が速い!!」

威月「じゃ、久しぶりに使うか…全能眼発動!!」

グチユツ!!

目を潰して全能眼を発動させた…

威月「左右固定…イーノ・ドゥーエ」

ジュエル」

!!!」

威月「喰らえ」

黒い物体：化け物が威月に体当たりをしようとしたが…

ブチンッ！！

体の3分の2が消えた…いや食べられた…

その後、化け物はピクリとも動かなくなった…

威月「…なのは、封印しとけ」

なのは「えっ…う、うん…分かったの…」

—————

威月「よし、封印し終わったな？」

なのは「うん…でも、何でここに威月くんが？」

威月「それはな…不味い逃げるぞなのは！！」

なのは「えっ！何で！？」

威月「聞こえないのか！？」

……ピーポーピーポーピーポー

なのは「もじゃ、ここに居るのは少々不味いのでは……?」

威月「そつに決まってるだろ!!」

なのは「う、う、う……」

……じめんなち……い……

第十話 物事の原因なんてみんな後付けで良いんだよb y湯飲みの茶（後書き）

イーノ・ドワーエは”せん滅眼”て言っんですけど…
せん滅のせん字が出てこない…

PSPですから…

ではまた今度…

第十一話 何かをする「失う」(前書き)

短く区切ります。

理由は後書きにて…

第十一話 何かをする「失う

「公園…と思われる場所…」

なのは「はあ…はあ…も、もう大丈夫…かな？」

ユーノ「うん…人の気配もないから大丈夫だと思うよ…
所で…え」と…」

威月「俺の名前だったら威月…葉波威月だ…え」と、モルモット君」

ユーノ「モルモットじゃなくて！ユーノ！！ユーノ・スクライアで
す！！」

威月「すまん…リアルに間違えた」

ユーノ「間違えないで下さいよ！！」

間違えるなと言われても…

ユーノよりかモルモットの方が覚えやすいし…

ユーノ「次からは絶対！！間違えないで下さいよ！！」

威月「ああ、分かったよモルモツ…ユーノ」

ユーノ「はあ、もう良いです…それよりか早くそれを消して下さい」

威月「それ？」

ユ一ノ「目ですよ…」

やべっ

威月「…じゃ、消してくるからちよつと待ってる…」

なのは「え？ライトみたいに消えないの？」

威月「それが、この目は簡単に消えないんだなあ…
言って置くがグロいもんだぞ？」

なのは「にゃ！？…な、なら良いの…じゅっくじゅっく…」

く公園から離れた場所にて

さっき、なのはに言ったグロいとか簡単にON・OFF出来ないと言ったのは嘘だ…

目を閉じる…それだけで全能眼はライトのように切ることが出来る…

それだけだったら、皆素晴らしい能力と言うかもしれない…

だが、物事に絶対に、必然的に”代償”が付く…

鉛筆で絵を書いたとき…絵は確かに良い物になった…
しかし、”鉛筆が短くなった…”

レストランに行つてステーキを食べた…
しかし、ステーキになった”牛は死んでしまった…”

学校に行き勉強をした…
しかし、勉強をした分の”時間を失った…”

この様に…物事には代償が付いている…
そこに例外はない…

だから、全能眼も…

ゆっくり…目を閉じる…
ゆっくり…ゆっくり…

皆さんは、目を閉じたとき何かを…必ずしも何かを思ってますか？

好きな人のこと…

寝ながら聞いている音楽の歌詞…

朝読んだ、新聞の内容…

様々な事が、目を瞑った時思い浮かぶ…

それが嫌なものでも…

全能眼の眼の代償は…

——嫌な記憶の再生——

そして…

——負の感情の拡大——

目を閉じた瞬間…頭痛によって…記憶の再生によって、俺はその場で倒れた…

第十一話 何かをする「失う（後書き）」

記憶の再生です…

再生編を加えると、またややこしく成るので…

今日中に再生編を出します。

では…

第十二話 嫌なキオク…残虐な眼…（前書き）

記憶再生編です…

第十二話 嫌なキオク…残虐な眼…

「??? お兄ちゃん！お兄ちゃん！今日は楽しい見学なんだよね！」

威月「見学だけだぞ？そんなに観ても楽しくもないし…」

「???」だって、次元航空エネルギー駆動炉ヒュウドラが見れるんだよー！！」

威月「まあ、別に楽しみではないって言ったら嘘に成るけど…システムがまだだから…」

「???」お兄ちゃん…もうデバイスのシステムなんてまだやってるの？

お兄ちゃんには、別の魔法があるでしょ？」

威月「威力が違うんだよ…」

あの魔法は殺傷能力しかないから…

それに、今回のシステムは”Start Upシステム”…

俺と母さんの計算だと、

10秒間だけだけど、約1000倍の速さで動けるよっけ…」

「???」あー！！あー！！あー！！聞こえない！！

あのね？”アリシア”には基本的にお兄ちゃんの声は聞こえるけど…システムの話とかデバイスの話はしないですよ…」

威月「あ…ごめん、”アリー”」

アリシア「うん!!分かってくれるなら良いよ!!
……それとね?…お兄ちゃん…」

威月「?…どうした??」

アリシア「こ、こ、こ…これ…プ、プレゼントだよ…?」
//
//

威月「…箱?」

アリシア「開けてみて…」
//
//
威月「…剣の形の紙飾り?」

アリシア「う…うん、アリシア一人で作ったんだ…嬉しい?」
//
//
//

威月「ああ!とっても嬉しいよ!!」

アリシア「な、なら…もう一つ…プ、プレゼントを…あ、あげる」
//
//
//

威月「もう一つ?」

アリシア「うん…世界で一つしかないものだよ…」
//
//
//
//

威月「世界で一つか…」

アリシア「じゃあ、目を瞑って…」
//
//
//
//

威月「ん……」

アリシア「じゃ、じゃあ、こ、これが世界に一つしかないプレゼントだよ！！」

威月「！？」

アリシア「ん……」

威月「…ふはっ！いきなりキスはないだろう！？」

アリシア「これが…世界に一つしかない…ア、アリシアのファーストキスだよ」／／／／／／／／

威月「ファースト！？」

アリシア「わ、私は…あ、アリシアは、お兄ちゃんのこと大好きだよ！

っ、付き合って欲しいくらい……」／／／／／／／／

威月「……………」

アリシア「け、結婚も考えて……」／／／／／／／／

威月「…フウ…良いよ、付き合っても……」

アリシア「…ふえ？」

威月「俺も、アリーが好きだ…大好きだ……」

アリシア「ほ、本当に？」

威月「ああ、そうだ、付き合っただけ欲しい…」

アリシア「…きゆうう…」

威月「おい…？アリー？」

プレシア「ふふふ、若いって良いわね…」

威月「か、母さん！？」

プレシア「最初から最後まで撮ってあげたわよ？
これで結婚式に流せるわ。」

威月「いや、まだ結婚しないから要らないって、そのビデオ。」

プレシア「まだ？何時かするって事ね！！これは早くドレスの準備
をしなくちゃ！！」

威月「うう…もう良いよそれで！！結婚します！！」

プレシア「じゃあ、宜しくね？」義理”でも可愛い娘なんだから

威月「はい、はい…分かりました…じゃ見学行ってきます…」

プレシア「行ってらっしゃい、床で興奮してるアリシアも連れて
行ってね？」

アリシア「っ、付き合っ…あ、甘々デート…はあ、はあ…

け、結婚したら…新婚初夜も…きゅう…」

威月「……………」

プレシア「何を想像してるのかなあ？」

威月「なっ！？何でもないよ！？行つてきます！！」

威月「ふう〜…母さんの所に居たら駄目だ…絶対恥ずかしいことがバレル…」

アリシア「はあ…はあ…新婚初夜…ねえ、お兄ちゃん？
どうせ、今やっても、後でやっても同じだから…」

威月「……………寝言は寝て言え。」

アリシア「今の間って何？もしかして…
お兄ちゃん、身体を綺麗にしてベットで待ってるからね…」

威月「…ほら、見学に来たんだろ？」

アリシア「あっ！ごまかした…いいもん、勝手にベットに入り込むから…」

威月「今日一日、見学に来ました、葉波威月とアリシア・テストロ

ツサです、宜しく願います。」

A「…はい、確認取れたよ、どうぞ中に…」

威月「有り難う御座います。」

威月「へえ、結構でかいなあ、なんて言うか、こう…迫力が違うよな…アリー？」

アリシア「…何これ？…」

威月「どうしたんだ、アリー」

アリシア「お兄ちゃんと離ればなれになっちゃってしまっ気がする…」

威月「何だよ、その勘…」

『緊急警報！緊急警報！』

第三ブロックにあるヒュウドラ内の魔力が縮小中！！
繰り返す！！第三ブロック…」

威月「ここじゃないか…逃げなきゃ」

『！？…魔力急に増えた！？』

急激な魔力縮小から拡大!?

——爆発——

威月「魔力障壁全開!?!?!ア——!?!」

アリシア「お兄ちゃん!?有り難う!?!」

なんとか、魔力障壁が間に合ったが…

威月「くそっ、魔力が…」

少年と少女は爆風の中に消えていった…

この日、俺は最愛の義妹を失った…

第十二話 嫌なキオク…残虐な眼…（後書き）

疲れたので寝ます。

では…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9603v/>

魔法少女リリカルなのは～魔王に転生させられた主人公～

2011年10月21日04時04分発行